

Title	八重撫子 : 鈴麓閑話その一
Author(s)	林, 和比古
Citation	語文. 13 P.24-P.27
Issue Date	1954-12-31
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/68467
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

八重撫子

鈴籠閑話 その一

林 和 比 古

浪華の粹人は「嘘かたまつて美遊をなす」といつた。文芸の本質もこんなものであらうと私はひそかに愛賞してゐる。

四五年前のことであつた。ある学校のレポートの中に奥の細道を論じて、有名な市振の遊女の記事は芭蕉の創作であるとする文章を見た。その着想の非凡と論証の巧妙なのに感心して最上点を呈したことがあつた。後に巖祭(二十三巻第六号)所載の松井篤十氏の「芭蕉市振の一夜」なる論文のあることを知り、かのレポートはこれの讀りでないかと推量せられて一杯食つたやうな後味の悪さを感じた。しかしこれは偶然的の暗合かもしれない。或は狭い見聞の教師に一杯くわして今頃はほくそ笑んでゐるのかも知れない。それはもう遠い過去へ沈んでしまつてわからない。

とにかく松井氏の「芭蕉市振の一夜」を

読んでみると、流石に本家だけあつて突に面白い。曾良日記を利用した細道研究論の中でもたしかに光彩陸離としてゐる。

その特徴的な点を拾ふと、例の遊女の記事の最後に

曾良に語れば書とどめ侍るとある。ところが曾良日記には遊女の記事は全然出てゐない。これはどうしたことだらう。(曾良が日記とは別に手紙か何かに書留めたといふのであらうか)。どうもさうらしくない)曾良日記に関して芭蕉が言及したのは細道中この箇所だけである。しかもそれが肝腎の日記に出てゐない。これをどう解釈したらよからうか。

曾良はこの旅行中のいろいろの事件を彼の日記に書留めてをり、その事を芭蕉はよく知つてゐたにちがひない。にもかゝらず、この事件だけに「曾良に語れば書とどめ侍る」と書いたのは、この事件は事実無かつた事ではなからうか。芭蕉が創作した

話であるため、それを事実らしく見せる必要があつて「曾良に語れば書きとどめ侍る」と書いたのではなからうか。「曾良に語れば云々」の文句は、事實は曾良に語らなかつた事を物語つてゐるのだ、といふ皮肉な解釈になるのである。

遊女が僧侶の袂にすがつて救済を乞ふといふのは撰集抄の江口の遊女の話などから芭蕉が思ひついた事であらう。その思ひつきを市振の宿の一寸した種の上に花咲かせたのであらう。いはゞ市振の記事は細道一巻を連串的に美化するための、いはゞ恋の座であらう。

さう思つてこの箇所を読むと、事実としてはその場面に腑におちない所がちよいちよい目につくのであると松井氏は言はれた。私はこの考へ方に賛成なのであるが、慎重な学者は、この論証にははつきりした証拠がない。遊女の事も事実の記録かもしれないのである。さういふ証拠のない事は論ずる事が出来ないかとせられる。それも尤なので、かやうな場合に対する別な論証の方といふものがないか考へてみようとするのが本稿の目的である。

細道日光山の記事の中に芭蕉が曾良を紹介してゐる所がある。

旅立髷髪を剃て墨染にさまをかえ惣五を改め宗悟とす。

これについで志田義秀博士は、元祿二年の芭蕉一門の歳旦帖の

旧年名を改て

古き名は新敷名のとしおとこ 曾良
によつて、曾良が髷髪改名したのは元祿二年三月旅立つた時ではなく、その前年元祿二年（筆者註、元年の誤なるべし）歳末頃といふ事になるとせられた。（「芭蕉展望」五二頁）

頼原博士などはこれだけで細道の「旅立髷云々」を否定することには躊躇されるのであるが（角川文庫「奥の細道」）、惣五を宗悟と改めたのは元祿元年末であることは認めてよいと思はれる。たとへば「髷を剃り、墨染にさまをかえ」たのは文字通り旅立つ日の髷であつたのか、それとも元祿元年末改名と時期を同じうしたかは分らない。しかし、二三カ月前に円頂黒衣になつてゐても、旅立つ髷に剃刀ぐらゐは使つたであらうから、「旅立髷」の語によつて、二三ヶ月前の髷髪はあり得ないと否定することはできないであらう。「旅立髷云々」は一つ

の修辭的な表現と考へてよからう。

こんな穿鑿をするのが本意でなかつたので、私の言ひたいことは、曾良は細道の単なる道連でなくて、こゝで大いに脚色され、「細道」劇の重要な役者になつてゐることである。「剃捨て」の句をきつかけに、曾良をステージに上してきたのである。もしかしたらこの句も芭蕉の作であるかもしれない。「黒髮山」の名に興味を覚えた芭蕉自身がこの句を作り、それに曾良の身上を配して作りたてた「釈教」劇の演出でないかとさへ空想されるのである。でなければ、この句など曾良の俳諧書留に記されねばならぬと思ふのであるが、見当らない。しかし、こんな空想もたしかな証拠がないとして世の人から採殺されることになるのであらう。そこで一つ考を他にめぐらしてみる。

三

那須の黒ばねと云所にしる人あれば、是より野越にかゝりて直道をゆかんとす。
遙に一村を見かけてゆくに、雨降日暮る。
農夫の家に一夜をかりて、明くれば又野中をゆく。そこに野飼の馬あり。草刈おのこになげきよれば、野夫といへどもさすがに情しらぬには非ず。いかゞすべき

や、されども此野は縦横にわかれてうるゝ敷旅人の道ふみたがへんあやしう侍れば、此馬のとゞまる所にて馬をかへし給へとかし侍りぬ。ちいさきものふたり馬の跡したひてはしる。ひとりはお姫にて名をかさねと云。聞なれぬ名のやさしかりければ

かさねとは八重撫子の名なるべし

曾良

やがて人里に至れば、あたひを鞍轡に結付て馬を返しぬ。

美しい話である。これは二人が那須野ヶ原で實際出会つた事として世の人は疑つてゐないのである。しかしよく考へると疑はしい節が出てくる。

この話に対して二つの考へ方がある。

(a) この話は事実あつた通りに記されたものである。

(b) この話は芭蕉の作つたものであつて、事実ではない。(b)にも次の二つの場合がある。

(i) 事実全く無根である。

(ii) 草刈る男が居たとか、馬に乗つたといふ様な事実は少しあつた、それを種にして一篇の物語を芭蕉が構成した。

常識は(a)とみるのであるが、さうするとどうも附におちない所が多い。(後述)いま考へ方をかへて、(b)だと仮定してみよう。仮定法である。さうするといろんな疑問が案外面白く解けるのである。のみならず、市振の遊女の話も、「黒髮山」の句の記事も一挙に解けてくるのである。ちやうど地球が円いか、平面であるか之を一目で見たと者はあないが、かりに円いと仮定すると、いろんな現象の説明がつく。それによつて円いといふ仮説は正しいと考へざるを得ないといふあの考へ方である。

市振の遊女の話と八重撫子の話を比較してみると、この二つは類似点が多い。

(1)二つとも非常に美しい事件である。あまりにも文学的すぎるやうな話である。一方は遊女の歎き。伊勢参宮。旅僧の慈悲にすぎぬ。神仏の加護を祈るなど。他方は渺茫たる那須野ヶ原、草かる男、無邪気な小姫、馬上の旅、値を鞍壺へ結付ける。

前者は松井氏が撰集抄にその出典を求められたが、後者も出典があるのである。之については後素堂の「奥のほそ道解」に考証がある。

○此野は縦横にわかれて旅人の道ふみ違へん怪しう侍れば是農夫の教る言葉也、縦横はたよこ也、勅撰集(林註、新勅撰集のこと)へまた知らぬ旅

の道にそ出にけり野原篠原人に問ひつゝ、匡房。

○此馬の止る処にて後撰集詠人知らずへ夕されは道も見へねと故郷は本来し駒に任せてそ行。又韓子に云、齊桓公伐孤竹、春往冬還迷失道路、管仲云、老馬知可用、遂放老馬、而隨之。又平家物語に、別府小太郎以老馬、鴨越の道案内ヲ知りたる事あり、彼是の故事を心に含て、幸に模写したるにや。(林傍点)

○かさねとは句解||藻塩草に云撫子の山、奥州或は常陸と云々、歌にへ常に我旅寝してしか置く露の名をなつかしく撫子の山、此歌をも心得て句作したるにや。

実際に起つた事実とみるにはあまりに二つとも条件が揃ひすぎてゐる。こゝに考証されたやうな文学的知識に基いて芭蕉が創作したとみる方がありさうな事に思はれる。後素堂が「幸に模写したるにや」といつたのはどんな意味でいつてゐるのか興味がある。

(2)二つの話は曾良日記に出てゐない。

曾良日記に出てゐない話はずべて芭蕉の虚構であるといふのではない。長い旅中の事であるから、曾良日記に漏れた事件も多いであらう。それにしてもこれだけの美しく面白い話が、しかも二つとも変

化の少し退屈な旅程に於て起つたのであるから、いかな曾良でも何か書誌しさうなのに、一言半句も書いてゐない。これはどう考へたらよいのだらう。仮定に従つて、芭蕉の虚構とすれば、もちろん曾良が日記に書く筈がないわけだから、うまく説明がつくのである。

(3)遊女の話は曾良日記に誌されていないからはず、芭蕉はわざ／＼「曾良に語れば書とどめ侍る」と書いてゐる。こゝに至つて芭蕉の虚構であることが明らかになる。前に述べた。虚構であるが故に、真実であることの傍証を設けたいといふ気持が、芭蕉をしてこの文句をかゝせたと解するのが妥当ではあるまいか。人智が進んでくるとアリバイのとゞつてゐる事件は臭いとまづ考へなければならぬかもしれない。

「曾良に語れば書とどめ侍る」といふ文句は非常に大切な意味をもつのである。次に八重撫子の話にも、この文句に該当する表現がある。

かさねとは八重撫子の名なるべし

曾良

これである。

書かれたものだけを信ずるといふなら、これはもちろん曾良の句であるが、よく考へてみると曾良の句らしくない。曾良には「よもすがら秋風きくや裏の山」の

やうな絶唱もあるが、彼の句は佳句も駄句も全体として粘りが強く、古風なのである。独断的な言ひ方で、賛成して貰へるかどうか分らないが、八重撫子の句の様な軽い新しい句はつくれさうにもないのである。しかし芭蕉なら作れる。「名なるべし」などといふ一風ある表現も類例が見られる。

此梅に牛も初音と鳴つべし

(江戸両吟集)

ばせをに鶴絵かけるに

鶴鳴や其声に芭蕉やれぬべし

(曾良書留)

藻にすだく白魚やとらば消ぬべき

(東日記)

こんな気持は私の独断かと思つたら外にもさう考へる人があつたのは面白い。

馬のあとをしたって来た小娘がかさねという名の子であつたことは、偶然な事実であらうが、何といふ詩的な事実であつたことだらう。「かさねとは八重撫子の名成べし」という句もすうりとして上品な即興である。この句は其角本に曾良の字がなく、芭蕉の作となつてゐるが、どうも芭蕉の作らしく高雅な風致がある。この点だけは其角本に従ひたいと思ふ。この紀行には多くの挿話をはさんでゐるが、この那須野の一節などはことに詩趣に富んだ

ものであると思う。(岩田九郎、奥の細道詳講。傍点筆者)

私に言はせると、この句は芭蕉のものである。曾良と誌したのは芭蕉の作為である。なぜ芭蕉が自分の名を誌さなかつたか。実はこの挿話全体が芭蕉の創作である。(草かる男などの種は実在したとしても)小さな事実から美しい夢を描いたのである。

しかしそれを虚でなくて、あくまで実とみせるためには「曾良」の名を使つた方が有効なのである。芭蕉は有効だと思つたのである。自分が言つたことでも人が言つたとして確からしさを増さうといふ心理なのである。この句と署名は遊女の条の「曾良に語れば書とよめ侍る」と同じはたらきをしてゐるのである。

其角本には曾良の名がないさうであるが、其角の書落しか、それとも案外、其角などが曾良の人物風を知悉してゐたから、一目でそのトリツクが分り、いくら素龍本に曾良とあつても、これをそのまま写す愚に堪へなかつたのかもしれない。

前述の後素堂の奥の細道解に「かさねとは……曾良」と書いてゐる。この「いかが」などに後素堂の困惑ぶりが想像されて私には面白くてたまらないのである。

(4)撫子の話も遊女の話もよく読むと辻褄

の合はぬ所があつて後の解釈者を迷はせてゐる。

- (イ)二人の子供は一寸走つただけか、馬のとなまるとして来たのか。
 - (ロ)芭蕉が馬から下りた後、馬はたの野へ帰るのか、それとも行着いた人里に家があつて、そこへ帰るのか。
 - (ハ)野飼の馬といふに於てはあまりに馴れてゐる。
 - (ニ)子供が最後送つてくるにしては、なぜ鞍轡にあたりを結付ける必要があるか。
- でもちろん俳文は物を理づめに書くものではない。しかしまた作り話はどこか首尾に一貫しないものをもつともいへるのである。

四

私のいひたいことは、遊女と撫子の二話とみせるために「曾良」の名を使つた方が有効なのである。芭蕉は有効だと思つたのである。自分が言つたことでも人が言つたとして確からしさを増さうといふ心理なのである。この句と署名は遊女の条の「曾良に語れば書とよめ侍る」と同じはたらきをしてゐるのである。其角本には曾良の名がないさうであるが、其角の書落しか、それとも案外、其角などが曾良の人物風を知悉してゐたから、一目でそのトリツクが分り、いくら素龍本に曾良とあつても、これをそのまま写す愚に堪へなかつたのかもしれない。

前述の後素堂の奥の細道解に「かさねとは……曾良」と書いてゐる。この「いかが」などに後素堂の困惑ぶりが想像されて私には面白くてたまらないのである。

撫子は芭蕉が描きし絵なるべし
大阪大学助教授(二九・一一・二〇)